

巻頭言 「AD」

宇野 元

教会学校で、イエス・キリストの誕生が、西暦における区切りになったという話をしました。西暦が用いられる際に時々みかける AD という文字は、Anno Domini アンノ・ドミニ「主の年において」の略語。一年をおぼえるのに、この二つの文字を最初に置いてみるのは、意味深いことだと思います。

新しい年に思いを寄せるいろいろな表現がありますね。ちょうど、新雪のゲレンデをスキーですべりだすときのように、真っ白な世界に出発する——そんなたとえに魅かれながら、考えます。はたして現実合致しているだろうか？ 年が明けても、多くのことは旧年からつづいている、おなじ課題を担っていると思うからです。新しい年を前にして、私たちが感じる期待と不安は、すでに抱えているものと、将来の不確かさがまじり合うことによるところが大きいでしょう。だれもが皆、そのような時のなかを進んでゆかなければなりません。「われわれは勇をふるって、しっかりと手綱を握りしめ、この岩、あの崖を避け、右に、左に、車を御して行くほかにすべはない。どこへ行くか、だれが知ろう。どこから来たのかさえ、馬はほとんどおぼえてはいない。」最晩年のゲーテは、自叙伝『詩と真実』をこの言葉で締めくくりました。彼はこれを壮年期の自作から引用しているのですが、それからおよそ40年を経ても変わらぬ思い、あるいは、年を重ねるほどに、いよいよ深まる思いだったにちがいありません。こうした思いは、私たちの胸にも染み込むものがあるでしょう。けれども、主の名と共にこの年を踏み出しました。

今年、自分が出会うこと、また、自分に委託されることに対して、どのようにしてふさわしく感謝をもって応えることができるのでしょうか？ 困難なときも、心を騒がせることなく、みずから問題を解決することによって、ではなく、私たちの先頭をゆく主が、たえず共にいてくださることによってです。

私たちの名によらず
私たちの思い煩いによらず
あなたの名、私たちの望みが宿る名によって
この年を歩ませてください